

16. 中国新疆ウイグルのカレーズ（3）－科普加依の岩画－

このシリーズの（1）の写真3と図1を再度見ていただきたい。これはトルファン盆地の西のはずれ、天山山脈の南麓に位置する科普加依（カプカイ）というところにある水利図の岩画 注1) で、その模型は前号に紹介したトルファンのカレーズ博物館に展示してある（写真1）。これをカレーズとしてよいかどうかは直ちには判断しかねるが、中国の研究者をして、『坎儿井は万里の長城、北京－杭州大運河と並んで中国の三大工事である。これはトルファンの諸族の勤労と知恵の結晶である』と言わしめている根拠の一つとなっていて、その場所は図1の●印の位置にある。

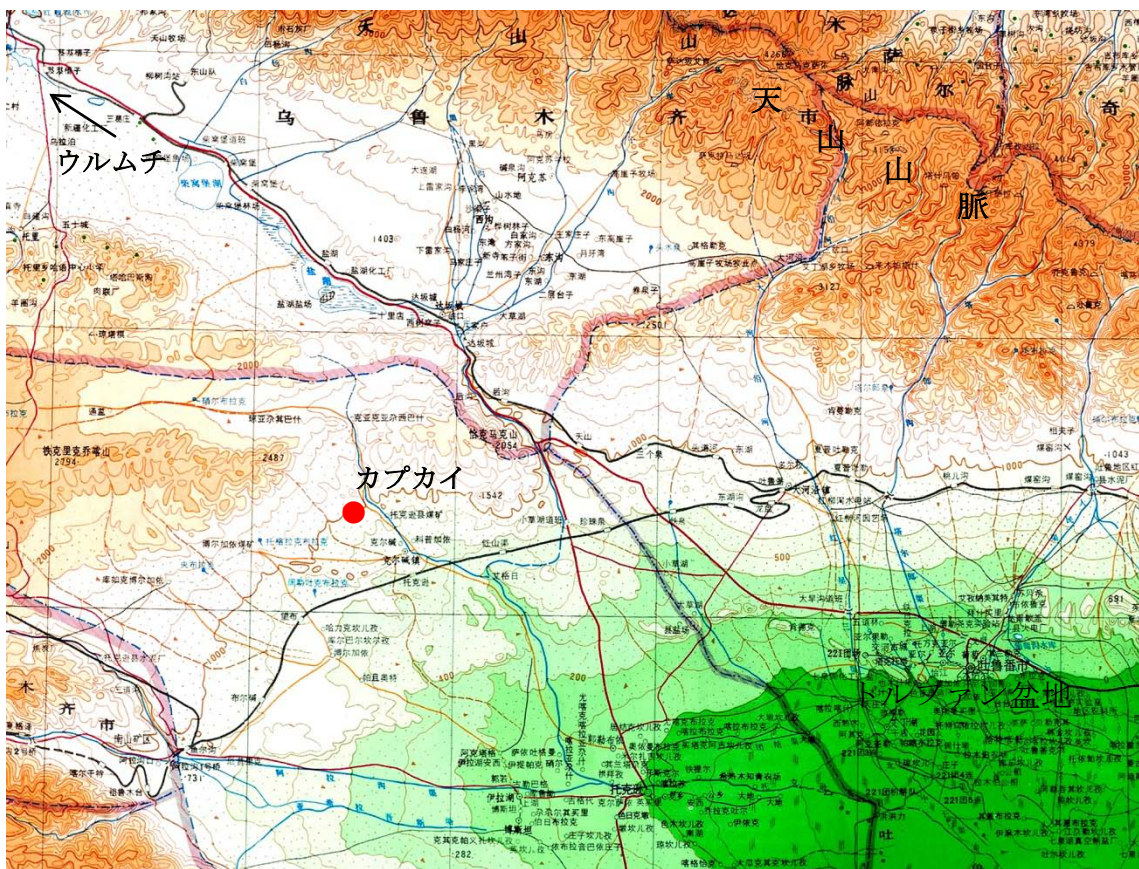


図1 カレーズの岩画が残されている科普加依（カプカイ）の位置

このあたりは前漢の時代から5世紀の中葉まで、トルファン地方で勢力を張っていた車師（シャシ）族の一部が生活した場で、付近にはその痕跡が数多く残されている。今回の話題の中心としている水利図の岩画以外にも往時の生活のありさまを伝える多種多様の岩画があり、また他にも耕作地の遺構や墓地遺跡、また天山山脈を南北に横断する“車師古道”なども残されていて、天山越えの往来もかなり盛んだったことがうかがえる。

注1) 岩画には岩を削って画いたものや、顔料で描くものもあ。主題の水利図は前者である。

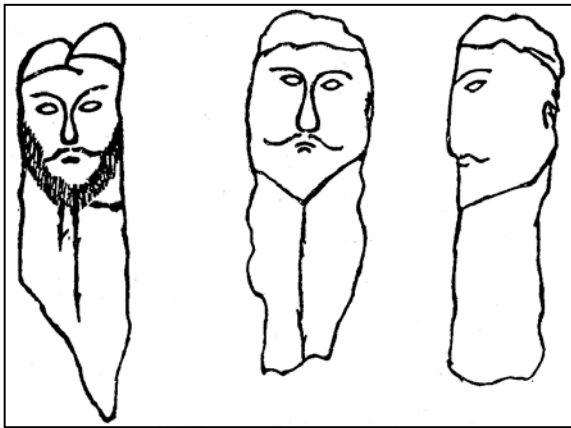


図2 木墨県博斯坦（ホスタン）牧場石人像

車師族は周辺から発掘される人骨からコーカソイド（所謂白人）の特徴があるとされているが、図2の石像の特徴からもこのことがうかがえる（注2）。なおこの種族はもともと天山北路の遊牧民だったが、その一部が吐魯番盆地に移り住み、半農半牧生活をはじめて定住したのではないかと考えられている。

昨年（平成22年）の9月のはじめに、筆者にとっての長年の課題だった水利図の岩画を直に観察する機会を得ることができた。場所は拓克遜県の県都拓克遜（トクソン）の北西約50kmの谷あいにある。

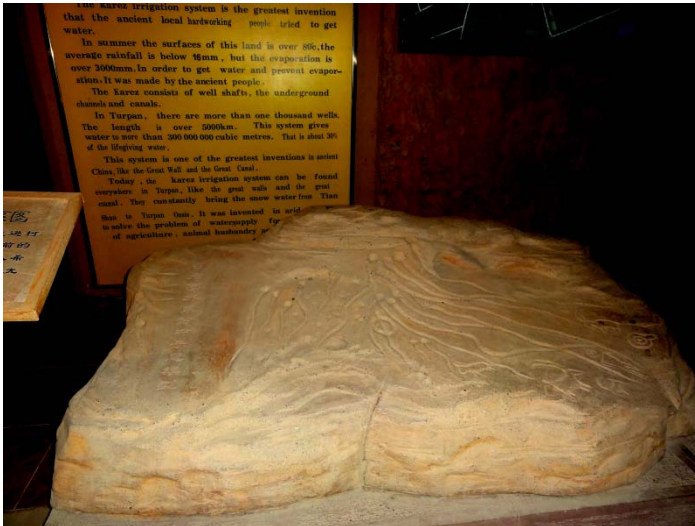


写真1 カレーズ博物館にある水利図の岩画の模型

このあたりの行政区名は庫加依（コクジャイ）鎮というが、これはウイグル語で“青い土地”という意味である。つまり緑豊かな土地ということであろう（写真2）。また科普加依（カプカイ）とはウイグル語で“野梧桐（ヤゴトウ）の泉”という意味である。なお野

梧桐とは荒地に自生する落葉高木で、実と葉から赤色染料をとるほか、樹皮や葉は薬用として用いられている。

この岩画のある谷は天山山脈を南北に切る谷の中では大きい方で、その周辺の露岩（写真3）には多種多様の岩画が残されている。それらの岩画には大角羊、駱駝、馬などの家畜に加えて鹿、狼、虎、豹、狗などの野獣、そしてそれらを狩猟する人間の姿も生き生きと画かれている（図3、4）（注3）。

蘇 北海(1994)によれば、これらの岩画は古代車師族の父系氏族社会時期のもので、今から2,500～3,000年前のものと考えられ、もちろん本題の水利図も中国最古のものである。その岩画が刻されている岩石は塊状の泥灰質砂岩（写真4、5）で、かなり固く、このようなところに精緻な水利図を彫り上げた動機には古代人の強い思いといったものが感じられる。これについて想像をめぐらしてみるのも楽しい。

注2) トルファン県の東、哈密（ハミ）から分岐する天山北路の最初の要衝、木墨哈薩克（モリハザフ）自治県内にある。

注3) 図2、3、4、5は蘇 北海著「新疆岩画」新疆美術摄影出版社(1994)から引用したものである。



写真2 岩画の脇を流れる谷川沿いの豊かな緑



写真3 周辺の露岩、(○は水利図の岩画のある岩)

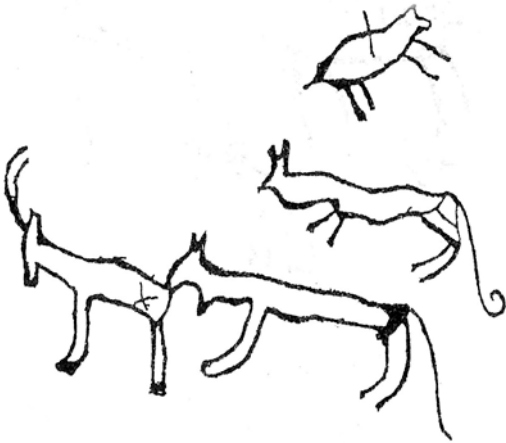


図3 大角羊を襲う狼の岩画

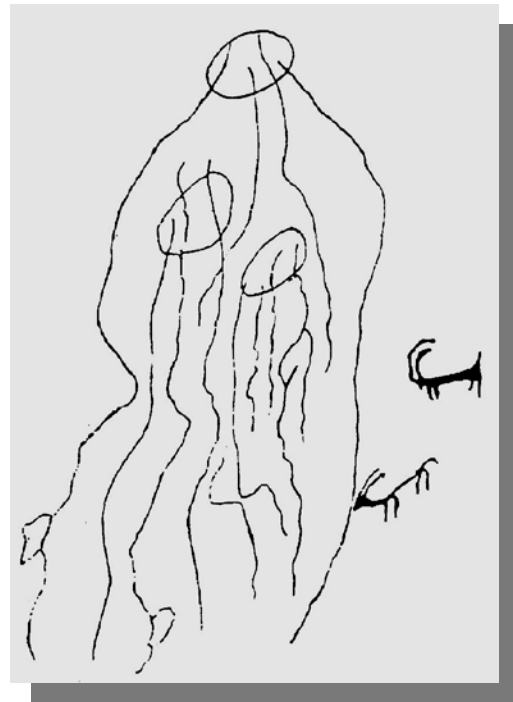


図4 水場に来る家畜の岩画
(湧水地から流れ出す水流)



図5 車師(シャシ)族の生活を物語る岩画



写真4 岩画が彫られている岩盤露頭
(案内の現地ウイグル人と筆者)



写真5 岩画の岩石

まず写真6の水利図の岩画をみていただきたい。これは、新疆ウイグル自治区坎児井研究会編、(2006)「新疆坎児井」の口絵写真である。筆者も全体写真を何枚か撮ったが、これほど鮮明な映像が得られなかったので、これを引用させていただくことにした。岩画の大きさは、20平方メートル以上はあろうか。前方は崖になっていて写真4はこの裏側にあたる。口絵写真の向こう側にみえる谷間は、“青い土地”(コクジャイ)という名のと通りの緑豊かな景観が広がっている。

この岩画は写實的、かつ克明で、実際の場所を忠実に記録したものではないか、というのが現場に立ってみて感じた第一印象である。耕作地や灌漑水路、その水を供給している水源(湧水または井戸)が多数認められる。かたい岩石だから自然にできたものではないことは明らかである。水源から流れ出した水流は互いに合流し、その川幅や深さはしだいに大きくなり、写真の下端を横切る大河に注いでいる。この写真が撮られた時、実際に水を流したらしく、その水たまりが各所に残っているのがみえる。この現場をみると誰でも同じようなことをしたくなるくらいにリアルである。

目を凝らしてこの岩画をよくみると、まるで隠し絵のように大角羊が単独、あるいは群をなして各所に画かれている。たとえば写真の中央下部や左上の方には水場に向かう羊の群れが、また右下には矢印にあるように、2匹の大角羊がかなり鮮明に画かれていて、その一つには写真にあるように子羊が抱えられている。この時代の車師族が如何に大きく牧畜とそれを支える水を大切にしていたかが理解できる。

水源とみられる数多くの窪みの中には線状に並んでいるものもみえるが、中国人研究者がこの画をカレーズとしている根拠であろうか。(○しるし)

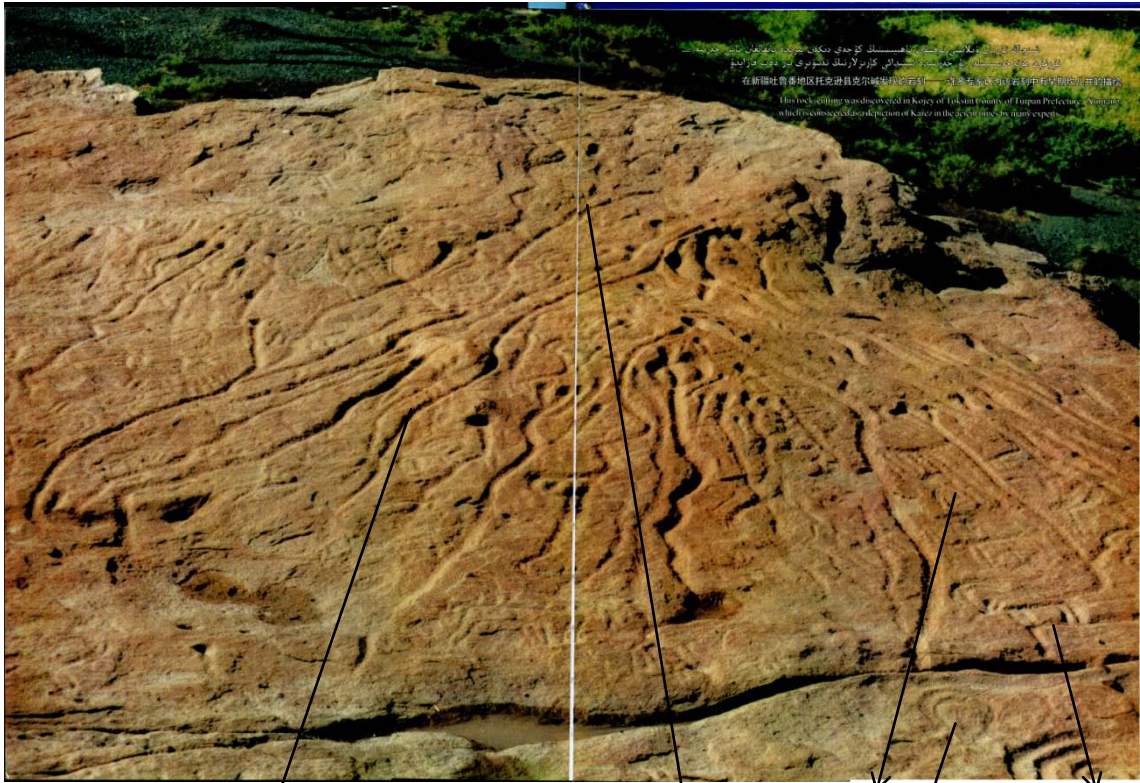


写真6 水利図の全景

耕作地

大角羊



2重の半円は角で、その中に子供の？大角羊が画かれている。



写真7 写真6の一部を接写

水利図の岩画のある場所とカプカイとの間は、写真 8 にあるように、直線距離で約 4km、途中は何もないゴビの荒野が展開する。黄白色部分は泥灰質砂岩の分布域で岩画はこのようなところに残されている。その他の青灰色部分は主にゴビからなる(写真9)。

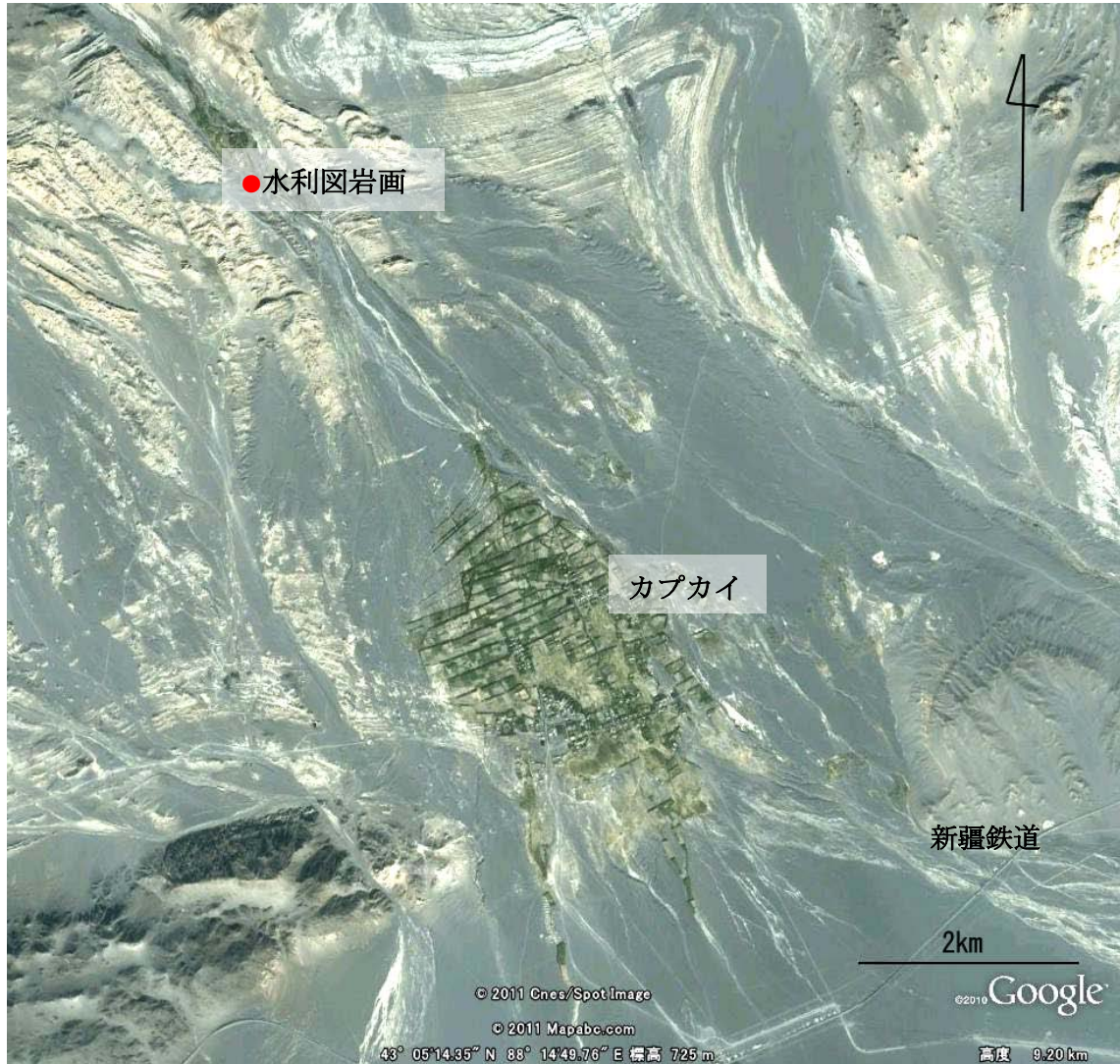


写真 8 科普加依（カプカイ）周辺の画像



写真 9 岩画への道（泥灰質砂岩露頭が点在する荒野）

カプカイ東南部の地下には古期岩石の潜丘の存在が推定され、それに支配されて地下水面は浅くなっているようで、このあたりに水源を有する水流の跡が多数認められる。

ところで今回は現地調査の時間に限りがあり、情報不足からこれ以上の考察は想像の域を出ないが、水利図の岩画が写真8のカプカイを中心とした地域を模したものとすると、色々な点がうまく説明できるように思われる。その根拠として、以下の点を挙げることができる。

- ① この地域は墓地遺跡群からみて、古代車師族の主要拠点の一つであったことが推察される。
- ② 現在のカプカイと古代の集落の位置は必ずしも同じではないにしても、岩画との距離は4km程度の範囲にあり、近接している。
- ③ 写真6の中央部から上部を接写した写真10によれば、岩画にみる水系が現地のそれをよく表現しているように見える。
- ④ 岩画にある泉、または井戸とみられる窪みがこのあたりに集中していて、耕作地と思われるところも認められ、現在の集落域の特徴によくマッチしている。



写真10 岩画の中央上部の接写

ところでこのような岩画が何故画かれたのであろうか？

蘇 北海著「新疆岩画」に掲載されている岩画で最も目立つのは狩猟や牧畜に関するもので、食の安定確保を願ったものと考えられる。また戦闘場面や祭祀にかかわるものもみられる。子孫繁栄を願ったものと思われる生殖崇拜にかかわるものも目立つ。いずれにしても何らかの願いを込めたものが多いのは間違いない。そのような中であってこの水利図は、水への感謝、あるいは安定した水の確保を願ったものと考えるのが自然であろう。

その背景として、筆者が注目しているのはトルファン地方を支配していた車師前国(前2世紀頃

～後5世紀頃)注4)の全時代を通じて続いた寒冷化、乾燥化の影響注5)で、時代を経るにしたがって表流水の減少、湧水の枯渇などの水不足が深刻化したことがあげられるのではないかと考えている。つまり水源の復活を祈願したものと考えている。写真10にみるような井戸と思われる窪みの配置はそのような背景を物語っているように思わ

注4) この時代、車師王国の中心はトルファン市にある交河故城にあった。

注5) 吉野正敏(1997)、佐川 英治(1983)などによる。

れる。

筆者らは岩画のある場所からさらに上流に向かったが、特段の情報は得られなかった
ので、写真 11 の左上あたりの地点から引き返したが、あとから Google Earth の画像を
みて、もっと時間をかけて丁寧に歩くべきだったと非常に後悔した。写真 11 の豎孔群
跡とした地点に同右側の写真のように列状に並んだ多数の豎孔が存在しているのが分
かったからである。



写真 11 岩画のある場所から上流とその河床に存在する豎孔跡

(図中の写真は Google Earth から引用したもの)

写真のように現在は廃墟となっているが、その豎孔群の下流は開水路となっていて、
下流側に広がる耕作地に導水されている。ここは写真 2 のように豊かな緑に被われてい

るので、地下水路はまだ生きているのかもしれない。トルファン地方にはこのように河床下に孔を穿ち、これを地下で横に繋げて導水している例があるので、筆者はこれをカレーズ（カナート）の原型と考えている。写真 10 をもう一度見ていただきたい。窪みが列状に並んでいる箇所がいくつか見られるが、これがそれに相当するのかも知れない。そして地下水位が下がる度に、上流側に向かって豎孔を加えていったものと考えられる。（あとがき）

カナート（カレーズ）を紹介している書物や文献では、まず最初に山麓斜面や扇状地頂部で、母井戸と呼ばれる豎孔を掘り、地下水を探り当ててから、下流側からそこに向けて、横穴によって連結された豎孔群を掘ってゆき、地下水を地表に導く、といった説明になっている。しかし、カナートの技術は長年の経験を経て完成されたもので、最初から文献にあるようなものであったとは考えにくい。すなわち当初はまず自然に湧き出している水が利用され、先にも触れた寒冷期（乾燥期）の環境変動の時期にあつて、“降水量の減少→地下水位の低下→湧水の枯渇→上流側への拡孔あるいは横穴による水量確保”、といった過程があつた筈で、一般に説明されているカナートの技法は、それらを踏まえて取得した技術であると考えた方が自然である。したがってカナートの技術はイランを発祥とし、これが四方に広まったとする一元的な考えにはどうしても抵抗を感じるのである。古代人が水を確保しようとした過程と、それを克服しようとした努力は地域を問わず共通している筈で、それから得た技術的過程も共通するところのあるのも当然である。したがって発祥とされる地域が複数あつてもよいではないか、というのが筆者の持論である。

今後さらに機会を得て、このような視点から知見の集積を図ってゆきたいと考えている。